今月の谷口雅春先生のお言葉

子供の善性を大いに伸ばしましょう

(1) わが子に天才が宿っていると信じましょう

われわれの内に無限が宿っている。この無限を掘り出せば人間は皆な天才となるのだ。

天才を、人間は皆もって生れて来ているのだ。それに人間は皆な天才にはならない。それは不合理だ。その不合理は誰がするか。人間が真理を知らないからだ。親たるものが真理を知らないからだ。ダイヤモンドを有っていながら石だと思って捨てて顧みないからだ。

人間を信ぜよ。神の創造を信ぜよ、生れたままの人間を信ぜよ、それは幼児だ。

幼児に宿っている天才はまだ彫琢しないダイヤモンドだ。瑾のつかない高貴だ。表面にまだ何の天才の閃めきがないからとて失望するな。表面を見て神の創造を疑うな。神が天才を造って人間のひとりびとりの中に埋蔵しておいたのは、神が人間をして安価な怠惰の中に腐敗せしめないためだ。人間みずからの努力と発見とを神が喜び給うからだ。

（新編『生命の實相』第22巻75～76頁）

(2) 騒がしさは、生命が生長するあらわれです

子供の騒がしさを叱るな。

子供に於ては、善とは静かなる調和ではない。生命にみちあふれた子供が噪がしいのは必然である。生長しつつあるものが喧ましいのは当然である。構造されつつあるものは必ず噪がしい。工場はものを構造する所であるが故に騒然としている。大工の家をたてるにも戛々たる響がきこえる。生長と構造とには必ず騒がしさが要るのだ。

「やかましい、静かにしておれ」この心なき叱責が今迄如何に多くの家庭に於て子供の生長を害して来たことだろう。

子供のさわがしさを叱る者は生命の生長に重大な障礙を置く者だ。子供の伸びようとする生命はおさえられて浪費する。かかる抑圧が永続的に行われるときそれは浪費される以下である。何故なら生命の発露を常におさえつける習慣をつけるとき生命は萎縮するからである。

（新編『生命の實相』第22巻81～82頁）

(3) 自分で考え、自分でやらせてみましょう

子供の心に明晰な思考力を発達させるには、自分で考え、自分の意見でやってみるというように子供のときから訓練すべきである。子供自身が思考力をはたらかせるよりも、大人自身が判断して、その判断を教えてやり、そのやり方を教えてやり、その通りさせる方が、簡単で、面倒くさくなく、また焦れったくもなく、経済的である場合でも、子供の思考力を発達させる上からはその他のことは忍ばねばならぬのである。決して子供の考えを頭ごなしに軽蔑してはならない。子供の考えに対してはあたかもそれが大天才の発案であるかのごとく慎重に取扱って考査し、批判し、善き点を賞めて力づけ、見のがした点を深切に指摘してやり、彼の注意力が広く万般にゆきとどいて公正な判断に達するように導いてやらねばならぬ。

（新編『生命の實相』第22巻141頁）

(4)「今に善くなる！」と子供を賞めましょう

言葉は種子を蒔く。それは必ず芽を出して実を結ぶのである。家庭からこうした罵りの声が絶えない限りは、かかる家庭で育てられた子供が生長して造り上げた社会が善くならないのは当然の事である。（中略）だから吾々はこれらの悪い種子の力を奪ってしまうために反対の種類の種子を蒔かなければならないのである。それは賞讃の種子である。讃嘆の種子である。如何に子供の現在の状態が賞めるに値しなくとも、「今に善くなる！」「きっと偉い人物になる！」こういうふうな漸進的進歩の暗示を与えるに相応わしくないことはないのである。そしてその暗示の力で、漸進的にその子供を良化して行くことは吾々の為し得る、否為さねばならない義務であるのだ。

（新編『生命の實相』第22巻167～168頁）

(5) 人類を輝かす使命をもっていると伝えましょう

諸君よ、先ず子供に教えよ。彼自身の生命の尊さを。――人間の生命の尊さを――そこには無限力の神が宿っていることを。展けば無限の力を発し、無限の天才をあらわし、彼自身の為のみならず、人類全体の輝きとなるものが彼自身の内に在ることを教えよ。彼をして彼が地上に生命を受けて来たのは、自分自身のためのみでないこと。人類全体の輝きを増し、人類全体の幸福を増すために神が偉大な使命を彼に与えて来たのであることを教えよ。この自覚こそ、最初の最も根本的な自覚であって、この自覚が幼時に植えつけられたものは必ず横道に外れないで、真に人類の公けな歓びのため何事かを奉仕しようと喜び励む人になるのである。

常に子供を鞭撻して、彼の善さを力説せよ。彼の美点を強調せよ、自分自身の有つ長所を自覚せしめよ。ここに子供を教養する極意があるのである。（新編『生命の實相』第22巻174頁）